

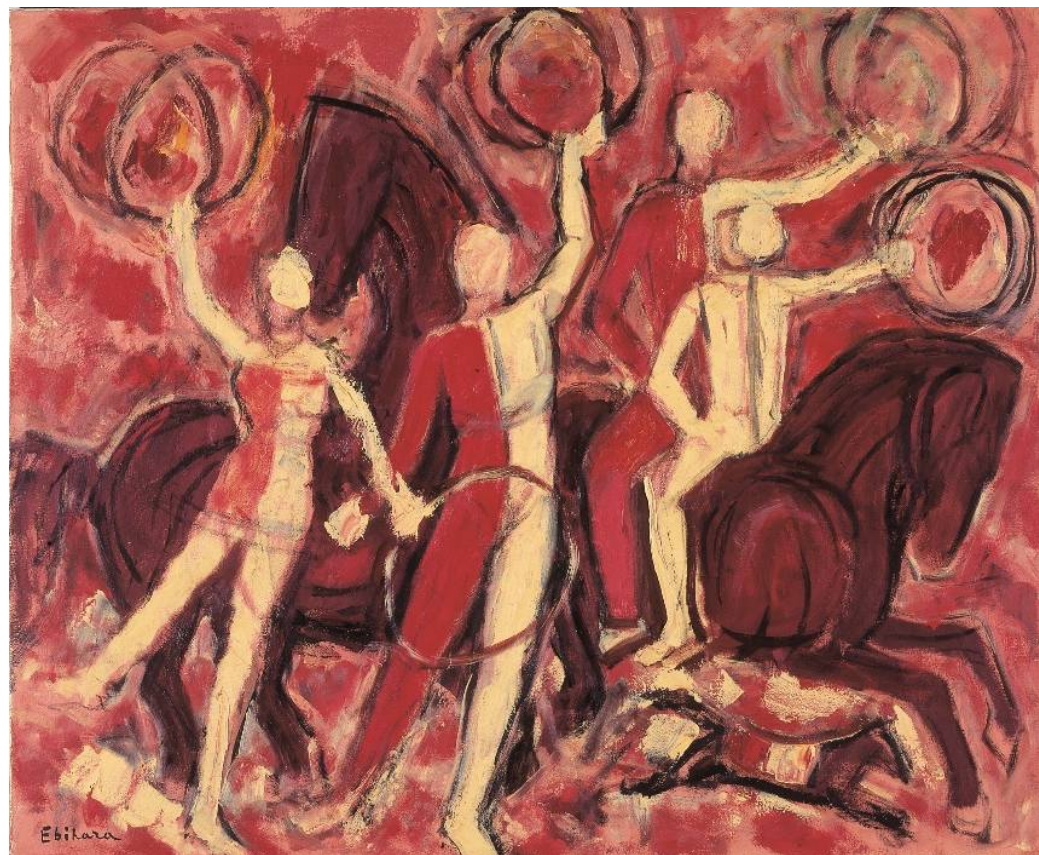
鹿児島市立美術館

市美だより 2020. 冬号

鹿児島美術界に多大な功績を残した画家

えびはらきのすけ
海老原喜之助 (1904~1970)

※小企画展「没後50年 海老原喜之助の軌跡」(1/3)では、本作を含め初期から晩年までの油彩画を一堂に展示しています。



《サーカス》 1970年制作

躍動する馬と騎乗者、芸人たちが歓声に響いています。本作は、海老原の集大成といえるサーカスをモチーフに、画業最後を飾る作品です。1970年7月の展覧会に出品され、その9月、海老原はパリで亡くなりました。

海老原喜之助は、本市住吉町生まれ。旧志布志中学校で同級の吉井 淳 二とともに画家を夢見て、1922年、卒業を待たず上京。翌23年パリへ旅立ちます。「エコール・ド・パリ」全盛期のパリでは、世界中の画家たちと肩を並べ「エビハラ・ブルー」と称される作品群で世界から認められる存在となりました。帰国後も精力的に新しい画風を築き上げ、日本画壇に新旋風を巻き起こします。また、鹿児島でも戦後すぐ吉井と共に南日本美術展創設にかかわり、鹿児島美術界に大きな影響を与えました。

今年は、没後50年。舞台を駆け回り、大勢の観客を魅了し続けたサーカスもいよいよ終演。閉幕寸前、最後の声援に呼応しているかのような本作は、まるで海老原の生涯を物語っているようです。

冬の収穫品展 12月22日(火)~3月7日(日)

ミニ特集 **ねずみ** **うし**
子から丑へ

年末から始まるこの展示では、令和2年の干支であるネズミと、令和3年の干支であるウシをモチーフとした作品をあつめてご紹介し、干支のバトンタッチをお楽しみいただきます。

時任鵬熊 《臥仔牛》 1907年



牛小屋に伏せる大きな牛の傍らに、ちょこんと小さな鶏も伏せる姿が見えるね。鵬熊(わくま)が、明治40年に東京から郷里の菱刈(現・伊佐市)に帰ってきたころの絵だよ。



新納忠之介がつくった《大黒天像》
小さなネズミがかくれているよ。



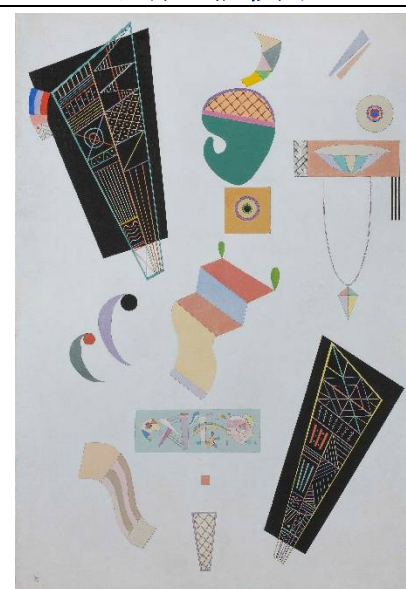
小企画展 **挑戦者たち**
—60年代の美術

《1月5日(火)→2月14日(日)》

アンフォルメルやポップアートなど、1960年代の欧米で生まれた新傾向の絵画と、その影響を受けた後代の日本作家の作品など、20世紀後半に新たな表現を模索した挑戦者たちを紹介しします。

西洋：油彩画

西洋：彫刻



●主な展示作品●

ワシリイ・カンディンスキー 《二つの黒》1941年 オットー・ザッキン 《オルフェ》1959年

ギリシャ神話に登場する竖琴と歌の名手 オルフェウスの姿。

Q どんな歌声が聞こえてきそうですか？

Q それは優しい歌声？ 叫び声？ どうしてそう思うのかな？

★ 同じポーズをとってみよう。何で後ろを振り向いて声を出しているのか想像してみよう。